

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成27年3月27日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 地球環境学堂

職 名 学 堂 長

氏 名 藤 井 滋 穂

助成の種類	平26年度・社会連携助成		
事業名	平成26年度 京都大学地球環境フォーラムおよび嶋臺塾の実施		
実施期間	平成26年4月16日 ～ 平成27年3月3日		
実施場所	京都大学時計台記念館百周年記念ホール、嶋 臺		
参加者	総数 445名	内訳	地球環境フォーラム 265名、嶋臺塾 178名
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(嶋臺塾記録等)		
会計報告	事業に要した経費総額	2,100,000円	
	うち当財団からの助成額	2,100,000円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	会場借料	64,800	64,800
	印刷製本費	1,032,696	1,032,696
	謝金	443,240	443,240
通信運搬費	13,452	13,452	
委託費	236,280	236,280	
消耗品費等	309,532	309,532	
合 計	2,100,000	2,100,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団のご支援により、地球環境フォーラムおよび嶋臺塾を各3回開催しました。毎回それぞれおよそ100名、60名程度と安定した参加者があり、京都大学の環境問題に関する研究成果を発信する場として、市民の間でも定着したとも言えます。また、嶋臺塾については、「記録」を紙媒体で編集・出版し、広く配布することができました。地球環境学堂にとっても、市民や外部の研究者との対話を通じて、今後の教育研究に役立つフィードバックを得ることができました。今後も引き続きご支援を賜ります様、お願い申し上げます。		

成 果 の 概 要

京都大学大学院地球環境学堂長 藤井 滋徳

京都大学大学院地球環境学堂では、教育研究成果を学内外へ発信し、その成果に基づいて今後の社会の在り方を市民と共に考え、その共同作業の結果を教育研究活動にフィードバックさせるために、地球環境フォーラムおよび嶋臺塾を開催している。地球環境フォーラムでは、大学内外の研究者からの話題提供の後に参加者も交えて広く議論する場としている。嶋臺塾は会場も伝統的な京町家として、「衣食住」など生活文化につながるテーマについて、本学教員と京の伝統文化を支える文化人による話題提供を受け、参加者全員で語り合う場を創りあげている。このように、アカデミックなテーマについて議論する場と、暮らしに密着したテーマについて語る場を提供することによって、最新の地球環境学の成果の共有と、地球環境をめぐる社会連携への展開をはかっている。

平成 26 年度は第 19 回から第 21 回まで計 3 回の地球環境フォーラムを開催した。

第 19 回は、「空・海・地中から〈見る〉環境問題」をメインテーマに、「新旧の衛星画像で見るシルクロード地域の歴史・文化景観」(小方登 地球環境学堂教授)、「海で暮らす動物の視点で眺める海洋環境」(佐藤克文 東京大学大気海洋研究所教授)、「海底探査・地下探査から考える地球環境」(後藤忠徳 工学研究科准教授)の 3 つの講演と総合討論を行った。目に見えない空間には環境問題は何も生じていないかのように思われがちだが、実際にはそうではなく、調査によってさまざまな病の徴候が観察されることがわかった。

第 20 回は、「環境思想を再考する」と題して、「生態学的自然観と地球環境」(岡田直紀 地球環境学堂准教授)、「R・カーソン『沈黙の春』にみられる科学と思想」(多田満 国立環境研究所主任研究員)、「分解の思想-食と農から考える」(藤原辰史 人文科学研究所准教授)の 3 つの講演と総合討論を行った。さまざまな環境問題を生み出す原因となった我々自身の価値観や生き方を見つめ直すために、自然や生命を総括的にとらえる機会となった。

第 21 回では「防災分野における国際協力の実践」と題して、「世界の災害と国際的な取り組み」(岡崎健二 地球環境学堂教授)、「甚大な地震被害を引き起こす途上国の現状と JICA の取組の概観」(檜府龍雄 国際協力機構国際協力専門員)、「世界の洪水と水災害・リスクマネジメント国際センターの国際貢献」(田中茂信 防災研究所教授)の 3 つの講演と総合討論を行った。近年世界各地で多様な自然災害が発生し、多数の犠牲者および大きな社会・経済的な損失が出ている中、日本の災害経験や科学技術をもとに今後可能な国際支援のあり方を考える機会となった。

7 年目を迎えた地球環境フォーラムには毎回ほぼ 100 名に近い参加者があり、地球環境問題を様々な角度から分かりやすく市民に伝える場として定着したと言える。高校生など若年層の参加者が増えているのが近年の傾向である。

嶋臺塾の平成 26 年度の活動として、まず、平成 25 年度に行った 3 回の嶋臺塾の記録を編集し、500 部を印刷、約 400 部を配布した。続いて、「海と山」「住まい」並びに「商い」をテーマとした 3 回の嶋臺塾を開催し、延べ 178 名の参加者を得た。

初回（第 30 回）は、「海せん山せんの暮らし」と題し、山里における人の暮らしと舞鶴湾の鱸（すずき）の生態をとりあげた。京都・美山の住人である鹿取悦子氏からは、島根大学を辞職し、大学時代に魅了された京都・美山に戻り、農家として、NOP のスタッフとして、そして猟師として、山里で暮らす中で、見てきたもの、感じてきたことの紹介があった。また、山下洋氏（フィールド科学教育研究センター教授）からは、舞鶴湾と由良川を行き来する鱸が、さまざまな環境悪化にもめげず、したたかに生き抜いている様子について、最新の研究成果を交えての紹介があった。会場からは、シカやクマをどう食べるか、川に上った鱸の味や寿命、子供に殺生を見せることの是非などについて、質問や意見が出され、山と海の現在に理解を深め、自然に身を置くことの意味について語り共有した。

第 31 回は、「住みこなす」と題し、モンゴルと京都・堀川団地の住まい方をテーマとした。学堂からは西前出氏（地球環境学堂・准教授）からは、モンゴルの住まい方の現在についての紹介があった。自然の回復力がたいへん弱い草原で、絶妙なバランスを保って暮らしてきた遊牧の民が、子供の教育や所得機会を求め、都市への定住化が進んでいる、その実情と、草原とのつきあい方の変化を知ることができた。大島祥子氏（スーク創生事務所）からは、京都堀川団地とそこで暮らす人々の変遷について紹介があった。公営住宅の「標準設計」ではなく、京都の職人達が「立体町家」として建てた堀川団地も、今では老朽化が進んでいるが、安易な建て替えではない再生が目指されている。そこに住み始めた若い人達は、DIY で大胆な内装の変更などを行い、町に溶け込む暮らし方を嗜好している。そうした住まい方や住む人の意識の変化について知り、住み方に合わせて環境を変えるのではなく、環境に合わせて住み方を変える知恵について考えることができた。

第 32 回は、「商うということ」と題し、祇園辻利の商いと近江八幡・たねやグループの取り組みをとりあげた。三好道弘氏（祇園辻利五代目店主）からは、戦後、祇園でお茶を商うようになった経緯、商店街に賑わいをもたらすため、意見の相違を乗り越えてアーケード化を進めた組みが紹介され、戦中から戦後にかけての変遷の中で、商いと人、商いと地域とのつながりについて知ることができた。また、清水夏樹氏（森里海連環学教育ユニット特定准教授）からは、近江八幡で、その活動が注目されている企業・たねやグループの活動が紹介された。たねやグループは、本業の製菓部門だけでなく、農産部門なども手がけ、近江八幡の里山の再生にも取り組んでいる。清水氏からは、森里海連環学の立場から、このような取り組みがどう評価されるのか、今企業に求められること、期待できることについて解説があった。商いはその顧客との関係で語られることが多いが、この回では、商店がおかれた地域とのつながりや共存・共栄の大切さについて再認識することができた。